

マクロスEW

まるまるっとアザラシ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2000年代初頭人類は史実上初の星間戦争を経験する。人類は初めての星間戦争
にて、種の絶滅という絶望的な危機に瀕したが、『文化』の力でこれを退けた。この経
験を基に人類は『人類播種計画』を立案、実行へと移していく。

かくして、人類はまだ見ぬ居住可能惑星を『新天地』として目指し、広大な宇宙へと
旅立つた。

人類は宇宙という広大な世界で様々な人類種、生命体と遭遇することとなり、また
様々なものが人類に牙をむいた。

人類は『文化』を盾に、武器に、これを打ち碎き前へと進む足を止めるることはなかつ

た。

今次、新たに人類が立ち向かうべき存在が現れた。
しかし、それは“人類”という決して清浄ではない歴史に眼を向けなければいけない
ものであった。

時に西暦2070年、銀河系外円部を航行していた第27次新マクロス級超長距離移民船団“エターナル”、第28次新マクロス級超長距離移民船団“ウォーカー”はそれに直面し、そこに生きる人々は“抗い、生きる”こととなる。

これは遠い未来で、人類が“人の意思”と“人の意地”を貫き通したお話。

原作「マクロスシリーズ」

「超時空要塞マクロス」、「超時空要塞マクロスII」、「マクロスプラス」、「マクロス7」、「マクロスゼロ」、「マクロスF」、「マクロス△」をすべて参考にしています。

※この二次小説は原作ではまだ描かれていない時代、移民船団での出来事を妄想して作成しています。設定や内容に関しては独自解釈で作成しています。今後判明する公式設定や作品の内容は作者の技量的に対応できない場合がございます。ご了承ください。

それでも一人でも多くの方に、私の妄想を見ていただきたいと思つています。

目

次

第一話

生きるということ

第二話

泣いちゃ、ダメだ

——

24 1

第一話 生きるということ

マクロスAG 第一話「生きるということ」

「…バトル „ヴァルキュリア“、こちらは第6機動艦隊群所属ブレイブ小隊：部隊コード12006402、哨戒任務終了につき着艦の許可を願う。」

「こちらヴァルキュリアコントロール、ブレイブ小隊：IFFを確認した。着艦を許可する。本艦左舷グアンタナモ第2ゲート使用されたし。繰り返す、左舷グアンタナモ第2ゲートを使用せよ。誘導ラインはフルオープン。」

「よし…。」

管制の返答に一息息をついた。

身体が非常に重く、だるい。軽いはずのパイロットスーツでさえ、身体に纏わりつき水を吸った衣服のように何とも言えない気持ち悪さを感じさせた。

「早く戻つて熱いシャワーでも浴びたい…。」

気持ちが急いでいた。

操縦桿を握る手は少し震えているように感じる。いや、痙攣という方が近いのかもし

れない。

正直なところ、今回はただの哨戒任務だつた：敵と会敵したわけでもなく、これが初任務というわけでもない。それなのに、それなのに手が痙攣するほどに、操縦桿を握る手はずつと力が入つていた。

「あら、ブレイブ・ワン、私もずっと警戒勤務中の。その気持ちはよく分かるわ。着艦したらゆづくりと熱いシャワーを浴びてね。」

俺の独り言が無線でつながつたままになつた相手へと流れてしまつたらしい。多少、心の内を聞かれてしまつたことへの恥ずかしさを感じた。このむず痒いような感覚を残しつつ、彼女の言葉で先ほどの憂鬱な気分は少し和らぎ、少しほはマシなトーンで返答ができた。

「ああ、ありがとうございます。すいません、なんか愚痴みたいで。」

「いいのいいの。今回の任務、いい気分な人なんてそういうないでしょ。」

「彼女は努めて明るく、そして励ますような感じさえした。」

「そうですね、ほんとに…」

「嫌ですね…と続けようとしたその時だ。」

「無線の向こう側で警報が鳴り響いた。」

「心臓が跳ね上がる。目が見開き、目の縁に痛みが走った。」

「…何？警報？…ちょっとまつて！」

無線の向こう側は警報と同時に騒々しくなる。何人もの話し声、大声が警報と交じりあい先ほどまでの明瞭な音は聞こえなくなり、ノイズのように耳障りなものへと変貌していく。

「…レーダーに感あり！これは…ヴァルキリー！数は…およそ2個小隊が接近中！IF F及び機種を照合中つ！ブレイブ・ワン、ブレイブ・ワン！着艦中止！着艦中止つ！ブレイブ小隊に迎撃要請！燃料は問題ないか！？」

大声というより叫び声。無線に早口で、粗暴ともいえる口調で言葉が放たれる。

「…つ！問題ないつ！ブレイブ小隊迎撃する…不明機の迎撃ポイントを知らせつ！」

言い終わるかどうかの時にはもうすでに操縦桿は引き起こされ、スロットルレバーは全開に押し込んでいる。コクピット内にエンジンの回転音が呻り、機体の振動が自身の鼓動と共に大きくなる。

「ブレイブ小隊、迎撃ポイントは02—パープルK233、繰り返す、02—パープルK233が迎撃ポイントつ！本艦右舷斜め後方ですつ！」

「了解した！ブレイブ小隊全機、フォーメーション2—A！」

「スクランブル！スクランブルつ！不明機が本艦に接近中つ！イーグル小隊、ゼブラ小隊緊急発艦準備継続中！各機発艦急げつ！護衛艦は何をしている！」

無線からはずつと差し迫った声が漏れる。それだけで気持ちは焦り、身体に力が入った。

機体はフルスロットルでバトル“ヴァルキュリア”の左舷から下方に回り込み、右舷後方に出て。姿勢を制御するためにエルロンを右へ、加えて操縦桿を捻ってバレルロール。回転する景色に星の光と人工の光が交じり合い、視界の端で線を引いて流れいく。一回転：機体は止まり、視界がはつきりと不明機のヴァルキリーを捉えた。

「ブレイブ小隊へ！接近中の不明機はIFFに応答ありつ！機体名VF-31ジークフリード、第27次移民船団“エターナル”所属機と断定！繰り返す、不明機は“アメイジング・グレイス”所属機！特約交戦規定に基づき不明機を敵機とする！オールウェポンズフリーつ！撃滅せよ！」

そんな馬鹿な…とその気持ちが大きかつたと思う。最初にこの任務を上官から説明を受けた時、吐き気がしたのをよく覚えている。

人類は西暦2000年代初頭異星人と接触、初めての星間戦争を経験し、種の絶滅という絶望的な危機に瀕した。これを“文化”的力で生き延びた人類は種の繁栄と保存のために未開宇宙へと足を踏み出し、まだ見ぬ移住可能な惑星への移民を始めた。そこで多くの惑星を見つけ、多種多様な人類種、生命体と遭遇し再び自身の存在をかけて戦ってきた歴史がある。多種多様な生命体は人類の想像を超える形で人類へと絶望的

な危機を与えたこともあつた。

例えばスピリチュアという生命エネルギーを奪うもの、ネットワーク生物として存在する共有意識集合生命体などだ。

宇宙は広い。とてつもなく広い。その中で俺たちが知らないことなど山ほどあるのだ。何が俺たちに牙をむき、想像もしない形で襲い掛かってくるのかまったく想像はできない。そう言つてしまつても間違いではない。そう思う、いやそうとしか思えない。

操縦桿を握る手は力が入る。

右に、左に、上に、下に：そうやつて忙しなく動かしながら、重しでも乗せられているかのように重い親指を動かした。親指はゆっくりと保護カバーを弾き、そこにある射撃ボタンを露出させる。ただそのボタンを押すだけで、目の前を飛ぶ“敵”を破壊することができる。いつもはそれを押すことに躊躇なんてしたことはない。

ただ、今回は別だ。本当に別だ。

でも：でもと自分の心に問い掛け続け、何度も何度も言い聞かせた。

敵の尻を追いかけ、Gが身体を右に左に押さえつけたとしても。

そして俺は、とうとうそのボタンへと指をかけた。

人間は、頭の中に映像を描くことができる。

それは現実に起きた記憶でも、思い描く妄想でも同様に。特に、自身が視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚と呼ばれる五感で感じたモノはより鮮明に映し出せる。ただ、それがどの感覺に頼り、どの感覺が自分にとつて大きな役割を担っているかは様々である。ゆえに、同じ事柄を経験した人が多数いたとしたら、それを頭の中に思い描いたとき、それぞれによつて微妙に異なるのだ。つまり、『感じ方』が違うのである。

では、妄想はどうか。

まあ、簡単に想像がつくと思うがこれも同様であり、人それぞれ異なる。なぜなら、妄想はその人が経験した事のある内容が強く反映されるからだ。経験とは実際に感じた事だけではなく、他人が経験した事柄を聞く、見るというような行動からも得ることはできる。これも『感じ方』によつて差異はもちろんある。

つまり、記憶、妄想はすべてが人それぞれで独立しており、完全に共有されることはない。

脳内で映像を思い描くとき、それは何をしている時だろうか。

たぶんに思いつくのは、何かを思い出そうとしているときではないか、何かをその記憶の海から得ようとしている時ではないか。それが経験した記憶でも、何かを思い描く

妄想でも。

単純にその事柄だけを捉えた場合、同じ生命体であるにも関わらず、これだけに差異が起きることは一体どれだけ不都合があるのか、と考えたくもなる。事象を見れば単一な内容でも、捉える側の生命体が多様な内容として解放してしまってはいるのだから。これが所謂、『感情』を産む。そして、それは感性としてその生命体一個一個に育まれる。

同じ生命体でありながら、差異を含み、それを個体として認める。集合体でありながら、個を見出し、その個を重要視する。その矛盾が一種の生命体を昇華させるのかもしない。

では、その矛盾を解消し、差異を共有した上で統合した場合、それは生命の昇華とはならないのか。それは衰退、現状の維持と成りうるのか、それはどちらなのか。それを見出す答えは残念ながら、今の私たちにはない。解を求める計算式すらも見当がつかない。それが現実だ。

一部抜粋 『『感じる』 著 ジェームズ・セルゲイ』

金属を通して“それ”を見る。

円の中に見える中心に“それ”を合わせ、指に力を籠めた。一瞬の閃光と、衝撃が肩を打ち付けた。小さな破裂の音と金属が弾き出されるような高い音が耳に突き刺さる。鼻につく煙のような匂い、そして一瞬の熱が顔に降りかかる。

“それ”は赤い液体を吹き出し、糸が切れた人形のように倒れこむ。ただ、それが人形と違うのは倒れた後も痙攣のようにピクピクと動いてることではないか。それが何に縋るように、何かに抵抗するようにも見える。

俺はそれを何度も何度も繰り返す。何度も、何度も。

「…アカツキ？」

遠慮がちな声、擦れるほどではないにしろ小さな声、そんな声で思考を現実に呼び戻される。別に不快ではない、ただ気持ちが乗らない。

「…何？」

その返事はぶつきらぼうだと良く言われる。別にそんなつもりはないけれど、他の人からはそう感じるらしい。

「や、ちょっと話をしたくてさ。おまえ疲れてない？」

こいつは割とそういう事も気にしない。だから、話をしていても割と億劫にはならない。それでも、ただ淡々と答える。

「別に…そうでもないよ。」

「そうでもないよって、それは見えないから聞いたんだけどさ。」

ため息が聞こえてきそうな嘆息気味の声。だけどため息はつかない。

「まあおまえがさ、本当に疲れてたって言わないうだろなってのは短い付き合いだけど何となくわかる…気がする。」

心配しているような声。ただ呆れも含まれているだろうか。

「この前の時もさ、お前ずっと前で戦つてただろ？何ていうか、無心のままにっていうかさ。皆は泣いてたり、怖がつてたりするのに。それでもお前はずっと撃ち続けてんだもん、何かあるのかと思うさ。」

「…。」

何て答えればいいのか、そういう沈黙。または黙秘。それをこいつは肯定と取ったのか、まあいいさと自分で納得させたように言い、立ち上がる。そして、少しばかり声のトーンを落としてこう言つた。

「俺たちさ、どうなるのかわからんねえけど“生きようぜ”。最後まで足搔いて、足搔いて。」

「ま、そうだな。」

何となくこの言葉には応えないといけない気がした。だから短くても声に出した。
 自分たちが巻き込まれたこの状況、そうならざる負えなかつたあの状況：その中でどうにかするには“生きる”ことしかない。失くしたもの、手に入らなかつたもの、そういつたものを全部キャラにするにはそうしていくしかないのかも知れない。諦めてしまうこととは簡単で、とても優美な匂いがするけれども、きっとそれは後悔するのだろう。泣いて叫んで苦しんで悔しがる…そう思えてしまう。それ程までに俺らは若かつたし、幼かつた。

俺らはどこに向かうのだろう。どうなれば正解で、どうすれば幸せなのだろうか。そんな疑問が付き纏うのに、誰も今はそこに触れたくはなかつた。触れられなかつた。ただ、“今”をどうするか。それだけがすべてだつた。

意識が深い記憶から呼び戻されたのは、けたたましく叫ぶサイレンだつた。
 赤色灯が点滅を繰り返し、そのサイレンを憎ましいものに見せつける。

「ツ！アカツキ！」

「わかってる。また来たのかも。」

努めて、落ち着いた声で彼に答えた。

「つたく！今日何回目だよつ！」

小さく舌打ち。それと同時に彼は盛大な悪態をついて見せた。まあ、俺自身もそれに同意。

サイレンが施設中に響き渡り、周りがざわつき騒ぎ始める。叫び声が周りで聞こえ、激しく地面をたたく音が聞こえた。皆、このサイレンの意味を理解している。

そう：

「敵が来た。アカツキ、迎え撃つぞ！」

ぐつと何かを呑み込んだような声を彼は押し出し、俺に手を伸ばした。この手はスタートの合図、地獄へと踏み込む狼煙、突撃を現す信号弾、それらにまつたく相違ない。でも、その手を取るしかない。いつものように、今までそうしてきたように。

だから、俺はその手を握りしめた。そして、地面を踏み締めて走り出したんだ。いつまで続くのか分からぬこの道を、彼と一緒に。

激しい爆発音、濛々と昇る煙がこの場を支配していた。硝煙の独特な匂いが鼻についた。割と長い間嗅いできたとはいえ、まだ慣れる気はない。壁に背を預け、身をかがめる俺の頭上を鉄の塊が飛び交っている。

「それで？この状況どうする？」

激しい爆発と跳弾の音、そんな中で落ち着いた声で問い合わせられた。こいつ本当に頭おかしいんじやないかと時々思つてしまふ。何を呑気に、と。

「とにかく、敵の前衛とあの小銃をどうにかしないと突破できない！」

爆発と射撃音で普通の会話をらまらない状況の中だ、俺は叫ぶように答える。そいつはそれを聞いて何かを考え込む。ただ、それは一瞬の間。考え込んだと思つた矢先、銃身を手で撫でた。何かを込めるように、何かを祈るように。ああ、たまにそんなことをしているなど思考を外した時、その次に思考を呼び戻したのはそいつが今まさに敵の銃弾から身を隠していた壁から身を乗り出そうとしていた。一瞬何が起きたのか理解していない、それでも身体は常識を把握していたのか、咄嗟にそいつの身体をつかんでいた。

「アカツキ、何してんだよっ！死ぬ気かっ！」

「これでもかと叫んだ。敵の銃弾が飛び交う真正面に身体をさらけ出す奴がどこにいる。自殺願望者か狂人のそれしかありえない。ただ、こいつはそうじやないとわかるのだが。

「何するんだ…？」

心底不思議そうに聞いてくるから、こつちがおかしいのかと思つてしまふ。でも間違つてない、そう決して間違つてはいなはず。

「何が：じやない！死ぬ気かつて聞いてるんだよ！」

何度もかわからぬ叫び。

「大丈夫、別に問題ないよ。」

アカツキは平然と答えた。

「大丈夫つてお前さ、あんな中で何をする気だ!?」

「ん？だつてさつき、敵の前衛と小銃をどうにかしないとつて言つただろう？」

カナンは不思議だと言わんばかりの顔で俺に問いかけ、俺の答え待たずに“だから”と続けた。

「潰してくる。」

そう言うと、止める間もなくもう一度飛び出していった。ずつしりと重いはずのアサルトライフルを抱えていても関わらず、飛ぶように跳ねるように走りぬけていく。それを見ながら俺は思う、こいつが人間に見えないのは何時からだろう。同じ年に見えないのはいつからだろう。

この状況になる前に一度だけ、カナンを見たことがある。“アイランド・ワン”にある新統合軍の基地に郊外学習で行つた時だつた。特に目立つたことはなく、記憶は曖昧だつた程だ。ただ、一つ思い出せると言えばヴァルキリーを熱心に見ていたことぐらいか。別に珍しいことではないと思うんだ。男の子は誰しも機械という名のカラクリは

大好きだし、戦闘機というのに憧れ、統合戦争で活躍したスカル小隊やマクロス7のファイヤーボンバー、バジュラ戦役でのSMS、どれをとってもヴァルキリーというモノにかつこよさを感じているというのが少年心だろう。でも、あいつは、アカツキがヴァルキリーを見る目は違つて見えたんだ。その時からあいつは何かが俺たちとは違うと感じさせていたと思う。

アカツキは飛び交う銃弾の中を踊るように、飛び交わすようにすり抜けていく。一步踏み込む度に地面を踏みつけ、空中に踊り出した。身体を空中で捻り、重力を感じさせない動きで相手に近づいていく。何歩目か分からぬ踏み出した足を地面に叩きつけた刹那、身体を沈み込ませてアサルトライフを構えた。その大きくもない身体が縮こまつたように固めた一瞬、短い爆発音が連続で鳴り響き、アサルトライフルから鉄の塊を撃ち出した。

俺が血と硝煙の匂いを感じた時には、アカツキはすでに身体を前に屈めて走り出している。流れるように、淀みなく。

そう、あいつには躊躇なんてものはないとしか思えない。

だから、あいつ以外の人間には命知らずとしか思えないんだ。

このクソみたいな世界で、あいつだけが何にも変えようもなく順応しているんだと思いい知らされる。

「クソッ！今だ！みんな行くぞっ！」

今日何度も分からぬ悪態をついてから、俺たちも走り出した。手に持つ銃を前に構えて、目に映る敵という敵に撃ちつけながら。

ああ、くそだ。本当に、クソだ。

本当に、この世界はクソだ。

人はみんな、毎日同じことを繰り返しているとは思わないだろうか。

もちろん微妙なところでは多少差異はあるだろうけど、ほとんど同じだと思う。

そして時間は有限だと良く言うけれど、誰しもがそれを理解しているにも関わらず、毎日同じことを繰り返している。

「刺激がない」、「面白いことがない」、そんなことを言いながら。

俺もそんな一人だつた。

朝起きて、学校に行き、部活をこなし、家に帰る。

毎日がこれだ。

何かが変わる？…いや、変わらない。本当に毎日同じことを繰り返している。壊れた

テープが永遠に同じ箇所を再生しているかのようだ。

だから、何か刺激が欲しかった。何か面白いことが起きないかと願っていた。

でも、結局みんなそうだと思うけれど、実際にいつも世界が壊れたとしたら…きっと前のほうが良かった…そう思うんだろう？

あんなに退屈で、あんなに惰性な生活が良かつたって感じるんだよ…きっと。

快晴。

突き抜けるほどの青い空とそれにコントラストのように浮かぶ雲。暖かな光を届けてくれる太陽。もうこれだけでいつもと何も変わらない。

そんな春のような陽気の中をぐだぐだと歩いていた。周りは同じく学校に行くのだろう制服に身を包む学生や、スーツを着て眠い目を擦るサラリーマンがちらほらと見えた。そんなに大きな通りでもないから人通りはそんなに多くはない。いつもと同じ光景、同じ時間、同じ人たち。

「ああ、面白くないな。」

ため息をつきながら、そんなことを呟いた。天気のように晴れ晴れとしない気持ちの中でも仕方がない、歩くのだけはやめていいない。

“皆さま、おはようございます。我らが第27次新マクロス級超長距離移民船団「エターナル」は、西暦2070年10月21日の朝を迎えました。ただ今、銀河系外円部を航行中です。本日は政府から次回の超長距離フォールドの計画が発表となります。累計6回目となる超長距離フォールドは……”

いつもの通学路を学校に向かう中、大きな通りに出たところでビルの大きなスクリーンに映る美人のニュースキャスターは、毎朝恒例の挨拶を誰に聞かせるともなく、慣れた口調で元気に語りかけていた。

“さて、本船団と同航路を取る第28次超長距離移民船団「ウォーカー」政府発表によりますと、精神統合共感覚システム：通称「ヒム」の開発が臨床実験段階に進んだと発表しており、新統合政府と共にこの実験に従事することを……”

信号が青に変わるもの数分、こちらの憂鬱な気持ちを汲み取ることもなくキャスターは淀みなく軽快にニュースを読み続けている。

こんな時は占いでもやつて、こちらの気分を多少なりとも紛らわしてくれないか。そんな理不尽な要求をスクリーンの向こうにいる美人キャスターに向けていた。

信号が青に変わる。

重く、煩わしい足を前に踏み出した。

「ふう……。」

自然とため息が出る。

学校へと向かう道、數十分の通学路、これだけで今日一日が予想できてしまう。

「おーい、ユウ！」

快活。その一言に尽きる声が背から聞こえてきた。振り向かなくとも誰が声をかけてきているのか分かる。まあ、間違いなくこの憂鬱な気持ちを晴らしてくれるものではない。ただ、その声を無視するのも忍びない。だから、俺は振り向いて声に答えることにした。

「ああ、アントンか、おはよ。」

「おう、おはよ！なんだ朝からしけてんな！」

俺の気持ちなど一つも汲み取らない彼は、表情だけは読み取るらしい。

「そうでもないさ。俺、朝は低血圧なんだ。」

嘘ではない。それっぽいように首を捻り、氣怠そうに見せる。悪癖もあるが、これでよく他人から“いつもだるそうだ”と高評価を頂いている。しかし、アントンは何も気にしていないというように肩を竦めてみせてから、話を続ける。

「それよりさ、新曲聞いたか！」

「ん？なんの？」

と、ここで盛大にため息をつかれた。

「何つておまえ。さては非国民だな！」

「これは流行りのジョークである。彼の中で。

「はあ…わかってるよ、ミファー・ソルトの新曲だらう？」
「そう！めっちゃ可愛いよなあー、ミファーちゃん！」

光悦と、悶えるように身体をクネクネと捩る。こいつはあのアイドルの顔が好きなのか、歌が好きなのか、俺の中ではずっと謎である。本人に聞いたこともあるが…『おまえ、そんな質問は真のファンにとつて邪道だぜ』…という俺の理解が及ばない答えが返ってきたので、もう諦めている。

「新曲『パラレル・アフター』のさ、あの衣装と表情…もう最高だよ。」

…前言撤回。

「まあ、確かにかわいいし、歌もいいかな。」

「だろう？あれでまだ俺たちと同い年なんだぜ？しかも、学校はチャーチル・ウエ斯顿だ。名門女子高つ！最高だろう！」

何がだ…。

そんな他愛もない会話が続く。

ふと、交差点に通りかかった時、軽快な音楽が耳に入ってきた。多調なリズムの中に聞き心地のよいドラマ、クラッシックのように流れる優美なピアノと金属楽器、そして

琴のようになぞらえて、その音楽を構成する全てが聞く者の心に深く深く浸透していく。

「これだよ、これ！」

興奮したように隣が叫んでいる。

「かあー！かわいい！」

ほんと、眞のファンは“これだよ、これ”。

「でも、ウォーカーのユリア・アナタトも捨てがたい！」

もう、何度もいいよ。

アントンはいいやつだが、熱狂的になりすぎるところが面倒だ。

人類は“歌”という“文化”で生き残ってきた事は歴史で学んでいる。だからこそ、この時代：アイドル、歌手といった類で名が売れるほどになるにはそういう狭き門だとアントンが言っていた。エターナルのミファーやウォーカーのユリアという彼女たちも相当努力しているんだろうとは思う。ただ、何となく俺たちのように何も刺激がない世界とは別次元の存在で、その世界で住む住人という事に羨望とちょっとした嫉妬を感じた事がある。

確かに、歌やルックで好意的ではあるがあんまりいい感情を持つていらないのも事実だった。こんな事をただの一般人の俺が言うのは変な話だが、アントンのように熱狂的なファンが傍にいるにも関わらず、俺が熱狂しない理由はそこにあった。

「ほら、学校に着いたぞ：アントン？」

意識を思考の海から戻してアントンに問いかけた。だが、アントンは前を見たまま惚けて固まっていた。俺の言葉は聞こえていないのか、何の反応もなくただ前を見つめている。

「アントン…？」

「おい、アントン!?」

何度か問いかけても反応がないことに業を煮やした俺は、何だと不思議に思いながら前に眼を向けた。そこにはいつもはない人だかりが出来ていた。それだけではなく、黄色い声と言えるような高い声や叫び声が飛び交っていた。

「何だ…？」

人だかりのほとんどは俺の同級生達だったが、所々に黒いスースに身を包んだ明らかにS.P.と言えそうな連中も混ざっている。

「ユウ…あれ、ユリアだ…？」

アントンが俺の服を掴みながらそう呟いた。

「ユリア？ エヴァーの？」

何を言い出したのか、と正直困惑した。有名人がこんなとこにいるはずがない。そもそも何で来る理由があるのか。熱狂的過ぎて幻覚でも見えるようになつたのかと本気

で心配になつた。ただ、いつもと違う光景が目の前にあるのは現実だ。

アントンは首が千切れるんじやないかと言うような速さで俺の方に向き直り、叫びに近い大声で叫ぶ。

「ユリアだよっ！間違いないっ！嘘だろ…まじかよ！」

そう言い残して彼は人だかりに向かつて走り出した。

「おいおい…。」

呆れというより驚き。嘆息というより深呼吸。友人のキチガイな行動に俺はどうとう疲れた。それでも、視線はその人だかりから離せてはいない。どことなく、俺自身も何かに期待していたのかもしれない。いつもの日常とは違う刺激を。

そしてそこで俺は、日常の中に突如として現れた非日常に心臓を高鳴らせることになつた。

人だかりの垣間から見えたのは光り輝くような金髪、風になびき流れるように揺れる長髪。すらつとしたスタイルに、大人びた整つた顔だった。

「あ…ほんとだ。」

それを呟いたのと同時に、彼女はこちらを見たような気がした。一瞬だ、そうだと思つただけで違うかもしれない。ただ、彼女は俺に向かつて笑つたように見えた。

垣間見えたその笑顔はスポットライトが当たられているのかのように光り輝いてい

た。

眩しく、神々しく、それを構成する全てのものが彼女を祝福しているかのように。

これが：全ての始まり

そして、全ての終わり。

日常は非日常へと変貌し、生きていた者は死に、死んでいた者が目を覚ました。

そう、神は死んだ。

与えられるべき „恩寵“ は消失し、鳴らされるべき „福音“ は遠く消え去つた。
ここで生き残るのは „人の意思“ 、 „人の意地“ だ。

与えられたものじやない。

俺たちが作り出したものだ。

第二話 泣いちゃ、だめだ

マクロスEW 第二話「泣いちゃ、だめだ」

静寂と緊張。

それがこの場を支配している。一步踏み出す毎に躊躇と恐怖が纏わりついてくる。一本の細い糸を切れないように、慎重に手繰り寄せていくようなものだつた。

「リーダー、今のところ反応は？」

緊張した声。細く聞き取るのがやつとの小声で話しかけてきたのは、今回同行した唯一の女性だ。

「ああ、ククリ。んーいや、特に奴らの反応はないかな。」

俺も小声で返した。その答えにククリと呼ばれた彼女は少し安堵した表情を見せた。

「でも、油断はできませんね。いつ奴らが来るか分からないです。」

「確かに、その通りだね。」

と答えて、後ろにいる全員に声を掛けた。

「みんな、もう一度呼吸を整えよう。ついでに武器の確認も。」

ここまで緊張していると、ちよつとした事でその緊張が切れることがある。だからこそ、細目に現在の状況を確認して各人が落ち着く必要があった。みんなが一息ついている間に俺はアカツキへと声を掛ける。

「アカツキ、地下への道はこっちであつてる?」

今回の目的地を唯一知つている人物がアカツキだ。その本人に確認を取る。何しろ、今入り込んでいるこの場所は新統合軍の元基地であり、人がいなくなつて数か月経過している。照明は落ち、暗闇でライトがなければ目の前すら見えない状態だつた。以前に一度だけ、ここに入つたことがあるため、ある程度認識はあるが、それでも完全に把握しているわけではない。

「そうだよ、こっちであつてる。次の角を右に曲がつて、そこから通路をまつすぐ進む。それで6つ目の十字路を超えたすぐ先にある扉が地下への階段。」

「すごいな、まるで見えてるかのようだ。

「すごい、さすがはアカツキね。」

ククリが感嘆の声を上げる。

「……。」

「ん?・どうしたの、リーダー?」

俺の表情を読み取ったのか、ククリが訝し気に聞いてくる。

「いや、何でもないよ。」

俺は努めて明るく返した。何もない、本当に特に何もない。場に変な空気が流れただよに感じた俺はさて、と話を変えるように全員を見渡して声を出した。

「みんな、武器は確認できたかな？できたらなら進もう。時間はかけられないしさ。」

焦っているように聞こえたかもしれない。だが、言つてることは本当だ。この基地に長時間いることは危険だつた。

俺たちは腰を上げ、再びゆっくりとだが通路を進み始めた。

なぜ、俺たちはここへ来たのか。そのことを歩きながら考えていた。危険の可能性を無視できないこの場所に、なぜ再び来ることになつたのか…それは一つの噂からだつた。

「ん？・ヴァルキリー…？」

思いも掛けない言葉が耳に届いた。

その時、俺は食堂の片隅で旨くもない保存食を仕方なく胃袋に押し込んでいた。この食糧事情は自分で把握しているし、仕方のない事だと理解していても気が滅入るものには違いない。そんな気分だからこそ、その単語を聞き間違えるわけがなかつた。

「ちょっと詳しく述べを教えてくれ。」

「そう言うや否や、旨くもない食料は皿に投げ捨て、その話をしていた連中のところへと移動した。

「いや、単なる噂…ですよ？本当に。だから、リーダーに話すようなことでもなくつて…。」

相手の勢いに押されたのか、少し淀んだ声で答えてきた。

「ああ、それでも構わないさ。どっちにしろそういう話は貴重だしね。」

「これは単なるフォローと言う意味でもない。」

しかし、相手はそんな深いことを考えるまでもなく気を良くして、そう言うならばと話を続けた。

「2日前ぐらいに聞いた話なんんですけど、あの…エリア7に新統合軍の基地があつたじゃないですか。そこにヴァルキリーがあるらしんんですけど…」

と話したここまでで遮る。

「待て待て、あそこは結構前に探つただろうさ？」

「あ、いやそなんんですけど、どうもあそこ、地下があるらしくてですね。で、俺たちこの前は地下は見てないぢやないですか、確か。」

「地下…？」

その言葉に、俺は顎に手を当てて考え込む。思考が巡り、記憶を探っていく。確かに、以前にその基地に立ち入った時は地下を確認していない。ただ、ここでの意味は地下という“存在”を確認していないという意味だ。

「地下…なんてあつたか？」

記憶を探つても、それがあつたような気がしない。ある程度、見て回つたはずだが…。

「あつたよ。」

ふと、声が遮つた。

「ん？ なんだつて、アカツキ？」

遮つた声は先ほどまで一緒に飯をつついていたアカツキで、この話に全く興味がなさそうだったのでほつといたのだが、いつの間にかすぐ傍まで來ていたようだ。

「だから、地下があつたつて。」

アカツキは聞き返したことに気分を悪くするでもなく、淡々と答えた

「本当かつ！」

思つていたより大きな声が出た。

その声は食堂中に響いたらしく、ここにいた他の連中が振り向いて訝しい表情を俺に向けている。少しばかりの恥ずかしさを感じつつも、咳ばらいを一つして気を取り直してからアカツキに質問を投げた。

「あーアカツキ君、それは本当かね？」
多少言葉が固いのは気のせいだろう。

「そうだつて言つてるじゃん。」

何回聞くのさ、とでも言いたげな表情だ。

「…いつから知つてた？」

「前に入つた時にあるつて気づいた。」

淡々と、本当に淡々と答える。

「…なぜ、あの時言わなかつた？」

隠そそうとしている。俺は必死にこのどうしようもないもどかしさを隠そうとしている。

「なぜつて…聞かれなかつたから？」

なんで疑問形で返すんだよ。

アカツキとはあつた時からこういうやつだと、理解はしているつもりだつた。物事に無神経、無関心。表情は乏しく、感情を表に出すことはほとんどない。それでいるのに見るものはしかつりと把握しているし、細かいことに気が付く。

「はあ…。」

俺は盛大なため息をついて見せた。ただ、アカツキにはそのため息の意味を理解でき

なかつたらしく、首を捻つて俺を変な顔で見つめていた。

「まあ、でもさすがつすねアカツキは。リーダーでも見つけてないようなこともしつかりと見てるんだから。尊敬します。」

「確かに…。」

と、彼らはアカツキに称賛の眼を向けていた。

「そうでもないよ、ただ単に運よく見つけただけ。」

本人にはそういうつもりはないのだろうけど、この場でのその返答はただの謙遜だ。

「…まあ、何にしろもう一度行つてみるか、基地にさ。」

と俺が言つた途端、彼らは今度は俺に驚愕の眼を向けて叫ぶように言つてきた。

「ほ、本気ですかリーダー!？」

「そうですよ、あんな危ないところに！」

あまりの反応の良さに少し驚いたが、しかしど俺は続ける。

「ヴァルキリーを手に入れることができれば俺たちの立場は大きく変わる。奴らに後れを取ることもないし、もしかしたら外と連絡が取れるかもしね。そうでなくとも、ウォーカー船団に行ける可能性もある。可能性の幅は広がる、そりだらう?」

俺のその言葉に彼らは黙つた。確かにそりだらうと理解はできるのだろう。ただ、危険だという事には変わりはない。彼らは黙つたまま何も言わないので、押しの一手を今

まさに口に出そうとしたが…。

「“生きる”にはそうするしかない。そういうことだろ、ユウ?」

「俺の見せ場をアカツキに取られた。まあ、いい気分はしないがしようがない。そ、まさにその通りさ。停まつてはいられない、歩き続けないと。」

その言葉は彼らだけに言つたわけではない。自分自身ににも、ここにいない人間にも言い聞かせてきた言葉なのだ。停まれば、それは停滞。この状況下で前に進まないことはイコール死にしかならない。この事を肝に銘じて、身体に刻み込んで、歩き続ける。

そうして俺たちは、エリア7の元新統合軍基地侵入の作戦を組み始めた。ただ、これがすべての歯車を回すことになるとは知らずに…。

思考の渦を泳ぎながらも、俺は歩みを止めてはいない。

周りの警戒に耳を澄まし、ライトで照らされる通路に眼を凝らして進み、ようやく俺たちは地下への扉へとたどり着いた。

「アカツキ、この扉か?」

俺は小声で問い合わせる。

「そうだよ。間違いない。」

端的に問い合わせる彼に、緊張が少しばかり緩む。一度深呼吸をしてから、周りの仲間に声を掛けた。

「さ、みんなここからだ。より注意して進もう。」

その言葉にみんなは一度ゆっくりと頷いた。大丈夫、みんな落ち着いている。周りを良く見えているし、お互いを気遣いあえている、大丈夫。

「でも…、入り口がここからだけとは限らないからね。大丈夫かな。」

そんな雰囲気を吹つ飛ばしたのは、相も変わらず無神経な相棒だった。一瞬で場は緊張に包まれた。

「い、いやまあ、それはしようがない。だから、気を付けて進もう…。」

俺はそんな無神経な言葉を誤魔化す。盛大なため息をつき、周りを見渡してから、銃を握りなおした。

「さあ、行こう。」

そして、もう一度みんなに声を掛けた。

この地下へと続く階段は暗闇が包んでいる。

歩くたびに靴が地面とぶつかりコツ、コツと音を立てた。ライトを下へ下へと照ら

し、俺たちはそのライトに導かれるように階段を下りて進んでいく。

何段目の階段が分からなくなつた頃、ようやく一番下へとたどり着いた。その場所には大きめの扉が6つほどあり、そこから中へと入れるようだつた。

「よし、鍵はかかるないな。ただ、どの扉がどこにつながつてゐるのか分からぬ。」

俺は一番手前にあつた扉を確認しながら、そうみんなに声を掛けた。

「手分けして探索しましよう。その方が早い。」

そう提案してきたのはククリだ。確かにククリの提案はもつともだ。ただ：「あまり多くない人数を分けるのは厳しいんでは。」

と長い髪を後ろでくくつているのが特徴的な青年が反論する。

「確かにククリの言うことも最もだし、カツキの言うことも間違ひじやない……と思う。」

そう、どちらの言い分も正しい。ただ、今回優先させるべきは…

「今回の作戦は“時間”が惜しい。いつ奴らが来るか分からないし、目標を発見できなければただの戦闘になつてしまふ。それは避けたい…だから、時間を優先しよう。」

そこまで言つて、俺はカツキの顔を見た。彼はその言葉にただ、長髪を揺らしながら肩を竦めて見せた。もともと、ちょっとした提案だし問題ないという意思表示だろう。彼は、まあそんな性格だしさ。

「よし、じゃあ各自ツーマンセルを組んで。俺は一人でいいし。」

こんな時はいつものパターンだ。一応のリーダーである俺は誰とも組まない。理由は色々とあるけれど、まあ省略。

全員がツーマンセルを組んだことを確認後、それぞれがゆっくりと各扉の前に着いた。

「じゃ、なにかあつたら連絡を。」

そう言つて、それぞれが扉を開け身体を滑り込ませていった。俺は全員が無事に中に入つたことを確認してから自分の扉を開けた。

軋む扉を開けた先は、暗闇が包む細い通路のようだつた。

ライトで先を照らすと少しカープしているように見える。先が曲がつていては自身の到着地点を確認できない。

「しようがない。」

そう呟いて、銃を前に向けてゆっくりと進み始めた。靴音が通路に響き、衣擦れの音がそれに混じっている。銃は俺自身がそれを握りなおす度に小さな金属音を立てる。

前方に神経を研ぎ澄ませてしまはらく進んだ。そうすると、俺の前に新たな扉が現れた。ゆっくりとその扉に触れるが、今回も鍵は必要ないようだつた。ただ、今までとは違うことがあつた。

それは静寂の中に響く“人が泣いているような声と嗚咽”聞こえることだつた。そ

う、扉を開けた先からそんな音が響いていたのだ。

「…人？」

そんな疑問が頭をよぎつた。だが、こんなところに人がいるとは思えない。ただ、注意は必要だ。ライトを消して、暗視ゴーグルに切り替える。視界は緑色の世界へと変わり、暗闇から物体を映しだす。

俺は中腰のまま、ゆっくりと足を進める。暗視ゴーグルのおかげで辺りがどうなつているのか確認ができた。ここはハンガーだ。戦闘機：ヴァルキリーを駐機しておく場所。あの噂通り、地下にヴァルキリーがあつた。ただ、辺りを見渡してもあるのは2機のみ：少ない。が、贅沢も言つていられないのも事実。2機でも十分な戦力にはなるのだから。

問題は一つ。

泣き声と嗚咽が聞こえるのはそのうちの1機からだと言うことだ。しかし、このまま放置というわけにはいかない。あれを何としても手に入れなくてならない。

俺は無線を手でたたき、信号を仲間に送つてから再び足を前に進め始める。何歩目か歩いた時、足の先が何かを蹴つた。心臓が高鳴り、蹴り飛ばしたものへと一瞬で銃口を向けた。しかし、それはただの容器のようだつた。

「食べ：カス？」

それはまだ健全に世界が回っていたころにショッピングセンターなどでよく見かけた食べ物を入れる容器だ。誰かが、食べたのだろうか。

そう思いながらも、確実にヴァルキリーに近づいた。そして確かにこのヴァルキリーのキヤノピーが開いたコクピットから人の気配がするし、確実に泣き声が聞こえた。

「人間…だろうか。それとも、敵か。」

どちらか分からぬ。ただ、泣いているということは、何か悲しいことがあつたのだ。俺は不安や恐怖というよりも、何故だかこのコクピットの中にいるものに心配を感じた。可笑しいだろう。こんなどこに人がいるとも思えないし、いたとしても味方だとは限らない。でも、自分でも理解しがたい感情が心を渦巻いていた。

何だろう…懐かしいような、切ないような。

分からぬ…分からぬけど、俺はいつの間にか梯子を昇り、コクピットをのぞき込んでいた。そこで、俺は何かに気づいた。何かとは言いづらい。自分でもうまく言葉にできないし、他に表現する方法が思いつかなかつた。

ただ、一言言えるとしたら…

“またか…”

つて言えるのかもしねない。

耳が痛くなるほどに辺りは静寂が包んでいる。
眼を開けているのか、閉じているのかさえ分からなくなる程に暗闇が辺りを支配している。

いつからここにいるのだろうか。

いつまでここにいるのだろうか。

そんな堂々巡りの疑問を何度自分自身に問いかけただろうか。

決して座り心地の良くないシート、広くもないこの空間に入り込んで幾時間が過ぎたか忘れてしまった。ここに来たときはまだ電気が生きていた。まだ非常灯のようなものが辺りを照らしていて、ほんのりと辺りを見渡せたのに。

どうしてここに来た。

どうしてここに来なければならなかつた。

私は逃げてきた。

何かは分からぬ “ナニカ” から。

とても怖くて、痛くて、何もかもが嫌になつた。でも、私の記憶の底にある一人の少年が言つた言葉：それが私をここまで生き永らえさせた。

“泣いちゃ、だめだよ”

ただ、それだけの言葉。

最初は、なんて横暴なのだろうと思つた。この人に私の何が理解できているのだろうと感じた。でも、この人は本氣で私に泣いて欲しくないと思つてゐる：それに気が付いた時には、彼は笑つていた。ただただ、笑つていた。私の顔をまつすぐに見て。

そう、あなたはただ私を見ていた。そのまつすぐな眼に、私がどれだけ救われたのかあなたは知らないだろう。そのまつすぐな言葉に、私がどれだけ勇気をもらつたかあなたは知らないだろう。でも：本当にあの時、私は救われた。そして、今回も救われた。彼はこの世界で生きているだろうか。

彼は今でも、私に笑いかけてくれるだろうか。

「もう一度：彼に会いたい。」

小さなこの空間で、その私が呟いた言葉が響いた。やまびこのように響き、私の心に響いた言葉が一つ一つと染み込んでいく。気持ちは大きくなり、心は空しさを感じ、急に心細くなつた。私の心は音を立てて締め付ける。溢れ出す思いは熱を持ち、身体の中心を熱くさせていく。

ふと、その熱さに驚いた瞬間にひたりと頬を冷たい何かが滑り落ちたことに気が付いた。初めは右頬に、そして続いて左頬に。それが涙だと理解できた頃には、涙は溢れる

ようになれていた。止めどなく流れる涙、それと一緒に抑えようのない嗚咽が漏れ、この空間内に響き渡つている。

「彼に会いたい。」

もう顔もほとんど覚えていない。声も小さい頃の彼の声でしか知らない。今会えたとしても、彼だと分からぬかもしれない。でも、でも…。

「彼に、会いたい。」

会つて、『ありがとう』と伝えたい。

こんな世界だからこそ、もう一度希望を持ちたい。

こんな世界だからこそ、負けたくない。

こんな世界だからこそ、強くありたい。

だから…だから、この涙は充電。次に歩き出すための、充電なの。

だから今は泣こう。思いつきり、涙が枯れるまで。

泣いて、泣いて、涙が枯れたとしても、この思いは枯れることなんてないのだから。

『泣いちゃ、だめだよ』

幻聴かと思つた。

とうとう、気が狂つたのかと思つた。

でも、違った。

それは生の声で、その声の主は私のすぐそばにいた。

「え…？」

声にもならない嗚咽のような声が出た。膝に突つ伏していた顔を上げ、泣き腫らした眼をそちらに向けた。そこには短髪の青年がいて、私に笑いかけていた。

「ほら、泣いてちやダメだつて。」

私は何を思つたのか、何を考えたのか分からない。彼のその声、その笑う顔を見て、もう心はぐちゃぐちゃになつた。

ただ、とにかく私は力のある限りに彼に抱きついた。

⋮今、俺はフリーズしている。

女の子に抱きつかれて、フリーズしている。

俺がコクピットを覗いた時、そこにいたのは小柄な女の子だつた。膝を抱えて、顔を埋めて泣いていた。その光景を見た俺は、少し昔を思い出していた。前にもこんな風に泣いている子がいたつけなど。その時に泣いていた子は、この世の終わりと言わんばかりのように延々と泣いていた。その泣き声もすごく辛そうに聞こえたのだ。

今、目の前で泣く子もそんな感じ。どうしてここにいるのか、何で泣いているのか：なんて分からぬ。だけど、心の奥底でそんなことよりもこの子を泣かしたままではいけない、そう思つたんだ。だから、声を掛けた。笑いながら。暗視ゴーグルも、ライトも、銃でさえも置いて。見えないだろうと思つたけれど、何かあるんだろうな：そんな時に限つて非常灯が点灯するんだから。

しかし、顔を見る間もなく抱きつかれた為か、彼女の顔ははつきりと見れなかつた。ただ、何となく見覚えがあるような気がしてゐた。とにかく、彼女をなだめないとと思つて、ゆつくりと髪をなでた。母親が子をあやすように、優しく、優しく。

しばらくの間、彼女は泣いていた。身体を振るわせながら。ただ、俺を抱きしめる力は結構強かつた。ふと、泣き声が止み、彼女が俺から身体を離した。震える手は俺の腕を沿つて、手を握りしめた。泣き腫らした眼が充血し、少し赤くなつてゐる。幾度涙を流したのか分からぬ頬には涙が通つた跡が残つていた。少しの間、俺たちはお互に見つめあつた。そんなに親しいとは思えない間柄のはずだが、不思議と不快ではなかつた。

「あ、あの…」

彼女が泣いて擦れたような声を絞り出した。ただ、声がうまく出ないようだつた。その声に自分でもびつくりしたのか、驚いた表情を見せる。

「大丈夫、ゆつくり。」

俺はそんな彼女にそうやつて声を掛けた。ただ、そう言いながらも何故だか見覚えがある彼女を必死に記憶の海から情報を探ろうと潜っていた。

「あ、あの…わ、私…。」

彼女が少しづつ声を戻していく。鈴が鳴るようなという言葉がぴったりのリンと鳴る綺麗な声…どこかで聞いたような。と、そこまで考えた所で、記憶の海から探し当った。

「あれ？ 君って、ミファー・ソルト？」

そう、エターナル船団で有名な歌手、その人だ。なぜこんなところに彼女がいるのか、彼女になぜ自分が懐かしさを感じているのか、そんな疑問が心の内に湧き上がってくる。しかし、その疑問に答えを見出す時間はなかつた。

大きな爆発音、それがすべての思考を遮つた。その音と衝撃に身体は一瞬で反応し、彼女をすばやく抱き寄せる。俺自身の身体で彼女を覆うようにと。

その爆発の直後、何人の足音がこのハンガーに響き渡つた。誰かが入ってきた…味方か、敵かと考える余地もなく銃撃戦が始まつた。

小さな破裂音、金属と金属がぶつかり合う音、大きな叫び声、このハンガーは一瞬で戦場へと変貌する。あたりは火薬と硝煙の匂いが充满し、非常灯でほんのりと照らされ

ていた辺りは煙と砂ぼこりでうつすらと靄がかかる。今自分がいるヴァルキリーを挟んで、両脇で靄の中を黒い影が忙しなく動き、赤い閃光がこれでもかと発光する。

「リーダー！」

そんな中で、誰かが自分に駆け寄ってくる。

「リーダー！ 敵です！」ちらに、早くつ！」

駆け寄つてくれたのはククリだ。すでに負傷しているのか、頭から血が垂れてい。る。ただ、今はそんな事を聞くときではない。俺は抱きしめている彼女をコクピットから出して地面へと降りる。地面に置いていた銃を取り、ククリへと声を掛ける。

「ククリ！ ありがとう！ で、状況はつ？」

しかし、彼女はその言葉に反応はしなかつた。俺が抱いている彼女に眼を向けて、放心している。

「だ：誰です？ この子。」

その疑問に答えている時間が今は無い。

「そんなのあとだ！ あとつ！」

俺は叫んだ。ま、どつちにしろ、俺自身もこの状況を説明するのは難しいのだけどね。それは置いといても、納得のいかない顔をしているククリを押して、他の仲間がいる物陰へと身体を投げ出して雪崩れ込むように飛び込んだ。

「…」

皆が一斉にこちらに眼を向けた。そして、訝し気な表情をしている。ただ、

「そんなことをしている場合じやないつ！反撃、反撃！」

そう言つて、俺自身も物陰から銃を出し、敵へと目掛けて撃ち始める。小さな閃光、肩に衝撃、硝煙と火薬の匂い…それはまるで麻薬のように、自分自身をすぐ他の思考からシャットアウトした。敵が蠢く物陰に、単発で一発ずつ打ち込んでいく。

「ヴァルキリーを何としても確保する！撃ち続けろ！」

敵も同じことを考えているはずだ。ヴァルキリーのような兵器をみすみすと見逃すはずがない。同じタイミングでこの場所に現れたことは予想外だが、出会った場所がハンガーでまだよかつた。もし、これが相手の方が少しでも先であれば、ヴァルキリーを手に入れる可能性はぐつと低かつたはずだ。状況が、戦況が拮抗している今ならばまだ可能性がある。

ただ、どうする…。

このまま撃ち合つてもそんなに戦況は動かない。そうなるとやはり、あのヴァルキリーに飛びつくしかないか…。でも、危険すぎる。

弾を撃ち尽くしたマガジンを放り投げ、新しいマガジンへと交換する。カチッとマガジンが填まり、右手でハンマーを一気に引き上げる。弾丸は銃身へと充填され、再び打

つ準備ができたことを知らせた。
どうする…。

迷つている…飛びつくべきか、このまま機会を伺うか。みんなも口には出さないがどうするのか、眼で問い合わせてくる。

どうする…。

「俺がヴァルキリーに飛びつくよ。ユウ、援護お願い。」

その俺の迷いを弾き飛ばしたのはアカツキだつた。何も感じさせない表情でそう言つてのける彼は、いつもこういう場面で声を擧げる。より危険な状況、誰もが躊躇する状況で率先して前に進もうするのだ。

「え、危ないですよ！アカツキ！」

「そうだよ、アカツキさん！」

と他のみんなが反論する。だが、何となく分かる…彼なら大丈夫だと、彼ならやつてくれる。そういう気持がみんなから見て取れる。

俺はアカツキの言葉を聞いた時、一瞬、安堵した気持ちが心に広がつたのを感じた。それが、どうしようもなく情けなかつた。俺がリーダーだ…、みんなを率いていかなくちゃいけない。

それはアカツキじやない、俺なんだ。

言葉だけ聞けばいい言葉かもしれない、だが俺の心の大部分を占めていたのは、『ただの対抗心』なのだ。いや、『劣等感』と言つてもいいのかかもしれない。その人間らしい感情は俺の心に染みわたり、それを言葉にする。

「だめだ、アカツキ。危険すぎる。あのヴァルキリーが動くとも限らないし、銃撃戦の真っただ中に身をさらして無傷で済むはずがない。」

「でも、このままじやジリ貧だ。きつとこつちが押し負ける。」

俺の言葉にアカツキはそう反応した。

わかってる、分かつてるさアカツキ。だから…。

「俺が行く…」

みんなが驚いた表情を見せた。それぞれが何を思つているのか分からぬ…ただ、アカツキだけは何となく俺の心の奥底にある気持ちに気づいているような気がしてならなかつた。

「わかつたよ、ユウ。みんなで援護する、だから、迷わず走り抜けて。」

アカツキは、俺の眼をまつすぐに見つめてそう言つた。そう彼が言つたことで、周りのみんなも何となく納得しそうだつた。無理もない、無謀なことをするのはいつもアカツキの役割だったから。

みんなが俺をヴァルキリーまで行かせるためにそれぞれが銃を構えた。マガジンの残弾を確認し、お互いが声を掛けあえる場所まで移動する。

よし、今ならいける…。

そう確信して、みんなに顔を向けた。一人一人を見て、ひとりひとりの表情を確認した。心配そうな表情、不安そうな表情、恐怖を感じている表情、そして無表情、それぞれがそれぞれの思いで今、ここにいる。今からすることは小さな対抗心からかも知れない。でも、結果俺たちが“生きる”ということに繋がるのだから、決して間違いではないはずだ…そう思いたい。アカツキではなくとも、俺が。

ただ、どうしても俺という小さな人間を自分で感じずにはいれなかつた。

「じゃ、行くぞ！」

そう心の決意と共に、自分を奮い立たせるために声に出した。身体を浮かせ、銃を構えなおし今まさに飛び出そうとしたその時、

「ダメっ！・ダメだよっ！」

という声とともに、誰かに腰に抱きつかれた。とても強く、とても強引に。

「!?」

俺は咄嗟に身体を翻して、抱きついた本人を見た。

「だめ、だめっ！・会えたのに！・やつと会えたのにつ！」

そう叫んで抱きついたのは、ミフアー・ソルト、彼女だつた。目にたっぷりの涙を蓄えて、今にも溢れ出しそうな思いをこらえるように必死な表情で俺を見ていた。その彼女の表情に俺の気持ちもフリーズする。“やつと会えたのに…”とはどういう意味なのか、どうしてここまで必死に俺を止めようとするのか、まったく分からなかつた。ただ、彼女をないがしろにしてはいけない、彼女をほつといてはいけない、そんな思いが込み上ってきた。自分でも不思議だつた。つい先ほどあつたばかりだというのに。

「大丈夫、大丈夫だよ。ちゃんと帰つてくるしさ、問題ない。」

何が大丈夫で問題ないのか説得力はないが、そう言うしかなかつた。その言葉をかけても、彼女はいつこうに離そつとはしてくれない。ただ抱きしめる力を強めるばかりだつた。

どうする…。

無理に引きはがすのも何だか気が引けて出来ずにいる俺を、みんながどうしようもなく見ている。訝し気な表情、不安な表情、みんながどうするのと眼で問い合わせてくる。ただ、どうしようもないのだけど。

だが、そんな時もみんなの期待に応えるのはアカツキだ。彼女の襟首を掴んだかと思つたその瞬間、その小さな身体のどこにそんな力があるのかと、いう程に思いつきり彼女を俺から引きはがした。

「今だ！ 行つて！」

そう言つて、アカツキは叫んだ。俺はその言葉を合図に走り出した。物陰を飛び越え、まっすぐにヴァルキリーへと。後ろで彼女が何かを叫んでいる。後ろ髪を引かれるような思いが込み上げてくる。でも、そんな時じゃない：そう心に叱咤して走る。思いつきり。

しかし、こちらが飛び出したのとほぼ同時に、敵側からも影が飛び出した。向こうは2人。2機しかないヴァルキリーをどちらも手に入れる気らしい。

そうはさせないと、俺は走りながらその2つの影に向けて銃を放つ。走りながら銃を構え、照準に影を捉えて撃ち続ける。走りながらではなかなか当たらない：そうであればと、俺は踏み込んだ足を地面に叩きつけ一度中腰で静止する。そして、照準に捉えた影を撃ち抜いた。鈍い音と悲鳴が響き、影の1つが倒れこんだ。

よし、と思つた瞬間、手と腕に強い衝撃と痛みが走り、持つていた銃がはじけ飛んだ。「ぐつ！」

そんな声にもならない音が口から飛び出した。銃は手から離れ、遠い床へと転がり落ちる。

もう1人の影が俺の銃を撃ち抜いたらしい。そう気づくころには俺はもう一度走り出していた。考える余裕はない。

腰からハンドガンを取り出し、ヴァルキリーへと飛びつく。相手もほぼ同時にコックピットへと身体をねじ込ませている。俺は左手でヴァルキリーの起動ボタンを探し、右手で自分の右側に見えるヴァルキリーのコクピットへとハンドガンを撃つ。相手も考えることは同じく、相手の銃弾が俺の身体を掠め、コクピット周りで金属音を立てて弾ける。

お互い砂ぼこりやらなんやらで相手を影でしか見えていない。ただ、適当に打つ銃弾でもこれだけ近ければ当たることある。霞と砂ぼこりの中で破裂音と小さな発光が互いの間で閃光した。

俺は起動ボタンを押した同時に、肩に衝撃と痛みが走ったのを感じた。血が飛び散り、右頬にねつとりとした液体が飛びつく。それは生暖かく、生臭い鉄の匂いを放つ。

「あがつ！」

鈍い声、鋭い痛み、肩から何かが漏れるような感覚がする。一瞬、視界がちらつき、意識が遠のくのを感じた。だが、この鋭い痛みで意識は無理に引き戻される。痛みで意識が朦朧とする中で、俺は何とか手順通りにヴァルキリーを起動させていく。エンジンが呻り、機体全体の振動が次第に大きくなる。

右肩を撃ち抜かれたのか、右腕に力が入らない。それでも機体が震える大きさに比例して思いも強くなる。ここで、ここで相手より先に起動させて向こうのヴァルキリーを

破壊しなければ、と。

エンジンが最高潮の震えを感じた瞬間、炉に火が入り一瞬の呻りと共にヴァルキリーは起動した。

“READY?”

眩い光と共に文字がコクピットディスプレイに浮かびあがる。

俺は何の迷いもなく、痛みで動かない右手を無理に動かしてレバーを引き起こした。

それと同時に向こうのヴァルキリーも動き始める。

痛みが体中に走る。意識が混濁しているような感じで靄が掛かつていて。スロットルレバーを動かし、操作レバーを右へ。機体が右手に持つガトリングの銃口が相手のヴァルキリーへと持ち上がる。しかし、相手も考えることは同じ。靄の中から黒光りを放つ銃口がこちらに鎌首を持ち上げる。銃口と銃口が向き合い、相手と俺の視線がお互いのコクピットからぶつかり合つた。一瞬の間、時間全体がスローになりお互いをにらみ合う。時間にしては恐らく数秒だけど、とてつもなく長い時間を感じた。

そして、今までにないとてつもない破裂音と発光と共に、お互いがトリガーを引いた。

この時、俺は何を考えていたらう。

無心のつもりだつたと思う。でも、きっと心はぐちゃぐちゃで色んな思いが錯綜して

いたと思う。

皆を守らないとという使命感、相手を打ち倒すという殺意、どうなるか分からないと
いう不安、肩の痛みや相手の銃口からの死の恐怖、そんなたくさんの思いが。
でも、心の奥底にあつたのは彼女の顔だった。
彼女を泣かしてはいけない。

彼女に悲しい思いをさせてはいけない。

“泣いちゃ、だめだ”
という切ない思いだった。